第4回 忘れられない看護エピソード
入選
一般部門

見える優しさ 見えない優しさ

【井上（いのうえ） 庸子（ようこ）・京都府】

病気のサインは普通の日常にある。3年前、喉の痛みが治らず受診した私に先生がこう言った。「バセドー病です」。その時はまだ通院しながら薬を飲めば治ると信じていたが、2カ月ほど過ぎたいつもの血液検査で再び異常が見つかった。薬による副作用で、白血球の数が著しく減少し、緊急入院となった。

その時、何よりも先に頭に浮かんだのは保育園に預けてきた3歳の息子のこと…。

その気持ちとは裏腹に入院3日目の夜、ついに白血球がゼロに近いレベルとなり、発熱。寒気、喉の痛みに襲われ、無菌室での闘病生活が始まった。40度近くの熱が続き、体中汗だらけ。何度も濡れタオルを持って来てくれる看護師さんはいつも笑顔で接してくれた。10日が過ぎ、病状が落ち着き始めた頃、主人に「何が欲しい？」と聞かれ、私は迷わず「子どもの写真」と答えた。まだ会えないと心の中で分かっていた。

少しの菌でも体に入ると重体となる私の病。病室に届く写真立てなどを看護師さんが一つ一つ丁寧に消毒布で拭いてくれた。

殺菌というより、大切な物だと分かってくれている手つきに安心感が芽生えた。さらに主人のサプライズ。「もう少ししたら窓から下を見て」。そう言って帰った後、6階の窓から下をのぞくと、手を振る主人の横でじいちゃんと走り回っていたのは、ずっと会いたかった息子だった。

とても小さな姿なのに、笑い声が耳に入ってくるような気がして涙がこぼれた。日に日に私の白血球は戻り、甲状腺全摘手術を受け、1カ月後には退院となった。

後日、分かったことがある。私の白血球が戻った日、看護師の方々がナースステーションで手を合わせて喜んでくださっていたことや、主人のサプライズ成功を願い、病室から一番よく見える場所を探して地図を描いてくださった看護師さんがいたと…。私の知らないところでも最大限の優しさがあふれていた。

あらためて先生、看護師の方々に感謝せずにはいられない。

〝心からありがとう〟。そう伝えたい。